

2020 年度「国際哲学特講」オンライン海外研修の報告
(法政大学文学部哲学科 安孫子信)

目次

§1 研修の概要	p 1
§2 研修の内容	p 3
§3 研修についての参加学生の声	p 8
§4 研修についての内部評価	p 15
§5 スクリーン・ショット画像で見る研修の様子	p 20

§1 研修の概要

■2020 年度「国際哲学特講」(秋学期 2 単位)では、例年通り、学期最後 2 月初めに、フランスのアルザス欧州日本学研究所 (CEEJA) の協力を得て、ドイツのハイデルベルグ大学 (ハンス・クレーマ先生担当) およびフランスのストラスブール大学 (黒田昭信先生担当) と合同ゼミを実施しました。コロナ禍の本年は、学期内の通常授業だけでなく、海外研修自身も zoom 遠隔で行いました。zoom 海外研修は初めてのことでしたが、期待を上回る成功を収めることができたとい感じています。

合同ゼミは 3 大学それぞれで正規の教育行事です。そしてこのゼミが締めくくる半期の授業全体が 3 大学で共同運営されています。すなわち 2020 年 8 月に翌年 2 月の合同ゼミでのテーマを共同で選定し、その後、9 月から翌年 1 月まで、それぞれの大学では合同ゼミに向けての授業を展開しました。その際、とくに本年度は、合同ゼミがオンラインになることが確定していたので、ストラスブール大学と法政大学との間では、10 月から 1 月まで、zoom 遠隔で、合同ゼミを準備する計 6 回 (各 90 分) の合同授業を実施しました。それと並行して、合同ゼミが近づく学期の終わりには、学生自身のイニシアティブで、zoom 遠隔での、また line を用いての、グループ対話も活発に行われました。

このような準備を経て、2 月 4 日から 10 日までの研修期間中には、日本とヨーロッパの 8 時間という時差から日本時間の 17 時～21 時 (ヨーロッパ時間 9 時～13 時) に、すべて zoom 遠隔で、以下の諸行事を実施しました。

2 月 4 日 (木) —ハイデルベルク大学との合同ゼミ

2 月 6 日 (土)・7 日 (日) —ストラスブール大学との合同ゼミ

2 月 8 日 (月) —CEEJA 担当者の案内でアルザスのヴァーチャル・ヴィジット

2 月 9 日 (火) —ストラスブール大学若手研究者によるレクチャー

2 月 10 日 (水) —「国際哲学特講」OBOG の協力による CEEJA 追体験企画

◆研修スケジュール表

2020年度 第11期 法政大学「国際哲学特講」研修 2月プログラム (オンライン版) Hosei University's 11th International Exchange Programme (Department of Philosophy) Joint Seminar February 2021 (ONLINE) Colmar 22.01.2021				
日程 Date	内容 Contents	協賛先 Video Distribution/country	ツール Application	
2021年2月4日 (木) Thursday 4 February 2021 17:00-20:00(JST) 9:00-12:00(CET)	ハイデルベルク大学/法政大学合同ゼミ Research exchanges with the Institute for Japanese Studies at Heidelberg University (Institut für Japanologie, Universität Heidelberg)	安孫子信 (法政大学) ハンヌ・マーティン・クレーマ (ハイデルベルク大学) Prof. ABIKO Shin (Hosei University) Prof. Hans Martin Krämer (Heidelberg University)	日本/ドイツ Japan/Germany	HeiConf Zoom
2021年2月6日 (土) Saturday 6 February 2021 17:00-20:00(JST) 9:00-12:00(CET)	ストラスブール大学/法政大学合同ゼミ 1 Research exchanges with the Department of Japanese Studies of the University of Strasbourg (Département d'études japonaises, Université de Strasbourg) 1	安孫子信 (法政大学) 黒田昭信 (ストラスブール大学) Prof. ABIKO Shin (Hosei University) Prof. KURODA Akinobu (Strasbourg University)	日本/フランス Japan/France	Zoom
2021年2月7日 (日) Sunday 7 February 2021 17:00-20:00(JST) 9:00-12:00(CET)	ストラスブール大学/法政大学合同ゼミ 2 Research exchanges with the Department of Japanese Studies of the University of Strasbourg (Département d'études japonaises, Université de Strasbourg) 2	安孫子信 (法政大学) 黒田昭信 (ストラスブール大学) Prof. ABIKO Shin (Hosei University) Prof. KURODA Akinobu (Strasbourg University)	日本/フランス Japan/France	Zoom
2021年2月8日 (月) Monday 8 February 2021 17:00-20:00(JST) 9:00-12:00(CET)	アルザスの紹介とヴァーチャル・ヴィジット Presentation of Alsace and Virtual Visit	徳江純子 (CEEJA) TOKUE Junko (CEEJA)	フランス France	Zoom
2021年2月9日 (火) Tuesday 9 February 2021 17:00-20:00(JST) 9:00-12:00(CET)	若手日本研究者レクチャー Conference by young researcher in Japanese studies	石黒秀昌 (ストラスブール大学) ISHIGURO Hidemasa (Strasbourg University)	フランス France	Zoom
2021年2月10日 (水) Wednesday 10 February 2021 17:00-20:00(JST) 9:00-12:00(CET)	CEEJAの紹介及びこれまでの研修修了者とのディスカッション Presentation of the CEEJA and meeting with alumni of this programme	徳江純子 (CEEJA) ・ 本プログラム卒業生 TOKUE Junko (CEEJA) Former students and graduates of this programme	フランス France	Zoom
★Pre-seminar (Heidelberg) Hauptseminar Japanologie WS 2020/21 Umwelt und Gesellschaft in Japan Nr. Datum Oberthema Unterthema Sek.lit. Quelle 1/ 05.11.20 Einführung 2/ 12.11.20 A. Philosophie und Ideologie Klimatheorie Watsuji 1935 3/ 19.11.20 A. Philosophie und Ideologie Buddhismus Suzuki 1936 4/ 26.11.20 B. Umweltschäden in der Geschichte Sankt-Zeit Totman 1989 5/ 03.12.20 B. Umweltschäden in der Geschichte Nachkriegszeit George 2002 6/ 10.12.20 C. Umweltschutzbewegungen vor Fukushima Hasegawa 2004 7/ 17.12.20 C. Umweltschutzbewegungen Post-Fukushima Hasegawa 2004 8/ 14.01.21 C. Umweltschutzbewegungen Tierschutz Matsuzaki 2010 9/ 21.01.21 C. Umweltschutzbewegungen Tierschutz Matsuzaki 2010 neueste Fassung des 動物愛護法 10/28.01.21 D. Klima- und Energiepolitik Kernenergie Aldrich 2008 11/04.02.21 D. Klima- und Energiepolitik erneuerbare Energien Fraser 2020 12/11.02.21 D. Klima- und Energiepolitik Klimapolitik Inerts/Upscopy2018 13/18.02.21 Abschluss ★Pre-seminar (Strasbourg) 修士1年満期 (16名) 和辻哲郎『風土』 2020年11月19日1回オンライン対談 ＊4グループ、3グループ発表 ＊1回30分の二講義 第1回目「倫理と風土」 第2回目「風土を考ふる／風土において考ふる Penser au « milieu » / Penser « au milieu »」 第3回目「感性と風土」 第4回目「内部世界の気象学と自己構築」 ＊自己紹介ビデオ作成 ＊フランスあるいはヨーロッパの風土についてのドキュメンタリー作成				
 HOSEI University  UNIVERSITÄT HEIDELBERG  UNIVERSITÉ DE STRASBOURG  ALSACE HAUT-RHIN  CEEJA				

§2 研修の内容

■合同ゼミ

今回は和辻哲郎『風土』を共通テキスト、「風土」を共通テーマとしました。ハイデルベルク大学でも、ストラスブール大学でも、まずはグループ発表があり、それを受けてグループで、また全体で討論行いました。ハイデルベルク大学とのゼミでは、法大生の1グループ(E)が「環境破壊と風土」という題で問題提起の発表を行いました。また、ストラスブール大学とのゼミでは、法大生とストラスブール大生混成の4グループ(A・B・C・D)が、2日間に亘り、順に、「日本とフランスでの風土の捉え方の違い」・「年中行事に見る風土」・「私たちが環境を守りたいと考える理由」・「風土と都市の関係性」の題で問題提起を行いました。これら発表から出発して、各授業では活発な議論が展開されました。

◆「合同ゼミを終えて」 [※安孫子が学生向けに書いた総括]

「風土」についての合同ゼミが終わりました。9月からの授業自体、「風土とは何か」の問いで始まり、5か月たって「風土とは何か」の問いで終わった感があります。ただ、ここまでの検討が、無駄だったわけではありません。

秋のある朝、学校へと早足に向かっていたその時に、通学路のわきの小さな公園から金木犀の香りが漂ってきて、私は思わず足をとめ、しばらくその香りの中にたたずむ。この想定から、われわれの「風土」の理解が始まりました。問題は「風土」であり、「風土」と「自然」との区別です。

大事な通学のはずですが、今、私はいつもの通学行為「の外に出て」、金木犀の香り「の中にいる」ことに気づきます(「志向的体验」)。そこにいるのは、皆が行っている通学行為を打ちやっ、香りの中で、幼かったころの金木犀の思い出に一瞬ふける自分自身です(「自己了解」)。そばに一人やはり香りに魅かれてたたずむ人がいます。その人は私に思わず「秋ですね」と声をかけてきます(「間柄」)。私はカバンからスマホを取り出して、金木犀の繊細な花を丁寧に写真に収めます(「客体化」)。ここでは、私は「風土」の内にいます。

他方、通学を急ぐ身には、「自然」の状態—その日の天気(暑い寒い、晴れ雨)や地面(上り下り、硬い柔らかい)の状態—は便利・不便ということで重要です。それは通学行為に大小の「影響」を与えます。その「影響」に抗して、我々は必要となれば「自然」に手を加え、その状態を「変化」もさせるでしょう(アーケードを設置する、階段を作る)。ここでは人間は行為者(通学)です。人間は「自然」に対していて、人間と「自然」は、主客ということで分離、対立しています。

ここでひとこと。この「風土」と「自然」の対立を、パスカルに置き直して考えることもできます。「幾何学の精神」が捉えるのが「自然」、「繊細の精神」が捉えるのが「風土」と言えるでしょう。金木犀の香りにも気づかず、毎日の通学を繰り返すのが「幾何学の精神」(オウムの嘴)だとすれば、何か違うということで、金木犀の香りに思わず立ち止まるのが「繊細の精神」。こうして「風土」の難しさは、「繊細の精神」の難しさに重なります。

さて、上の理解から今回の合同ゼミを振り返ってみましょう。ハイデルベルク大学とのゼミでは、風土(和辻哲郎『風土』) vs 反風土(坂口安吾『日本文化私観』)の対立が問題でした。この対立は、和辻の言葉で言えば、「風土」vs「自然」となるでしょう。坂口が言う「実生活」は、人間が「自然」に対してもっぱら便利・不便の観点で臨んでいる状態です。その状態には、この状態の美点が存在します。学校にさっそうと向かう学生には、「健康」や「美しさ」を言うことができるでしょう。他方、このときに「風土」的なものは、「実生活」から遊離した「空中楼阁」です。金木犀の香りにたたずんで思い浮かべられている子供の頃の回想は、確かに想像の話であって、それにふければ「実生活」では遅刻は必定です。便利・不便の観点から、金木犀は通学の妨げということで切り倒されるかもしれません(破壊)。さて、坂口のこの「自然に徹せよ」に対して、我々はどう答えたのでしょうか。

坂口の反風土に対するEグループの主張は、便利・不便の観点そのものに向けられました。Eグループによれば、その観点は、今現在の世代の便利・不便しか見ておらず、未来これからの世代の事を考えていない、となります。またさらに、その観点は、今現在の世代の便利・不便を、社会全体を支配している時代の精神に即して見てしまっているということもあります。便利・不便を、坂口の場合は‘戦争’への必要ということで見ていました(港に停泊する軍艦の「美しさ」)。そのとき彼は‘戦争’それ自身が破壊的であることを見逃しています。こうして、反風土はその根に大きく「破壊」を抱こんでいることが指摘されました。

さて、議論はここまで進められましたが、問題は残りました。反風土が大きく「破壊」を伴うとして、それに対して「風土」は何をするのでしょうか、何かできるのでしょうか。金木犀の香りの大切さを言うとして、その大切さとは何なののでしょうか。

あらためて「風土とは何か」が問題です。そしてストラスブール大学とのゼミ、それに続く徳江純子先生、石黒秀昌先生のレクチャーで一貫して問題となったのは、まさにこの問いでした。「風土」はフランス語になかなか訳すことができません。最後にはFûdoとされます。そのことを背景にして、Aグループの議論で、ストラスブールの学生は、風土は自然的でなく社会的ではないかと主張しました。通学の足を思わずとめさせるもの、それは金木犀ではなく、たとえば何か歴史的な記念碑ではないかというわけです。またBグループの議論で、ストラスブールの学生は、風土は変わらぬものではなく変わるものではないかと主張しま

した。正月のうれしさ、それは昔ながらの家族団らんからではなく、今では友達たちとのパーティの楽しさから来ている。さらに C グループの議論で、ストラスブールの学生は、フランスでは小学生のときの町の「大掃除」にしてから、風土の大切さというより、自然環境の大切さ、その保護を問題にしていると示唆しました。最後に D グループの観光都市の日仏比較では、京都は山に囲まれそこでは四季の変化が重要な要素だが、山もなく建物も石造りのストラスブールでは、季節はそう重要ではないということが指摘されました。

ということで、「風土」ということでの理解の違い、というより、ヨーロッパの学生たちにとっての「風土」の理解しがたさがそれが問題として残りました。そしてこの問題に一定のヒントを与えてくれたのが、徳江先生と石黒先生のお話でした。徳江先生のレクチャーでは、地理的条件が日本（島国）と真逆のアルザス（大陸の真ん中）が、歴史の中で、その帰属をドイツとフランスの間で何度も行き来させたことが、臨場感を持って語られました。こうして、「戦勝記念日」にこそフランス人である自分を感じるというストラスブールの学生、彼が他方で、同じ香りを発していると言っても、きのうまでフランスであったが、きょうはドイツであるその場所で咲くかもしれない金木犀に「自己了解」ということは、やはりむずかしいこととなるでしょう。石黒先生のレクチャーでは、「風土」における同じような「言語」における「自己了解」が説明されました（「日本語が〈わたし〉を形作る」）。しかし、きのうまでのフランス語が禁じられ、きょうからはドイツ語に替わるといった場所では、「言語」におけるこのような「自己了解」ということも、すんなりとは行かないことでしょう。そしてそれは、おそらく、「風土」の成り立ちがたさとも通じることとなるでしょう。

と、最後は、私のいささか勝手な仮説になってしまいましたが、「風土」ということで、こうしてここまで、実にいろいろの事を考えさせられた一週間でした。そして、今、我々はやはり最初の同じ問題、「風土とは何か」に戻ってきてしまっています。しばらくはこの問題は忘れたいがありますが、それぞれがまたどこかでこの問題を思い起こし、考えを進めることがあり、それを持ち寄って、いつかまた話し合うことができればと思います。

■アルザスのヴァーチャル・ヴィジット

徳江純子さん（CEEJA 教育研究部門責任者、ストラスブール大学日本学部講師）によって、アルザスの名所旧跡各所が、豊富な画像、映像を使って、かつ、縦軸にローマ時代に遡るアルザスの歴史を置く巧みな構成のもとで、縦横に語られました。

◆「ヴァーチャル・ヴィジットを終えて」〔※安孫子が学生向けに書いた簡単な総括〕

きのうも御苦労さまでした。とは言え、最大に苦労して下さったのは徳江さんで、アルザスの、本当にこれ以上ない、歴史的なヴィジットの案内役を、2時間を超えて、して下さいました。いつもの研究所のお忙しい時間を縫って準備を重ねて下さったわけで、事実調べも大

変な上に、それぞれの事実にふさわしい画像・映像の発掘も、あそこまで細かく徹底して行ってくださって、歴史は記憶、想像力の産物ですが、アルザスのほぼ完璧なヴァーチャル・ヴィジットをわれわれは昨日させていただきことになります。神聖ローマ帝国から始まり、三十年戦争、普仏戦争、第一次大戦、第二次大戦と、言語と国籍の激しい移り変わりを経験し、その経験が深く残るアルザスという場所を踏まえての、徳江さんのレクチャー最後の、境界というのは人と人とを分かち合えるものではなく、つなぐものだというメッセージは非常に重たいものです。そして、「風土」と言うのは閉じるものなのか、開くものなのかを改めて考えさせるものでもあります。また、ストラスブールの学生たちの、「自己了解が風土においてなされると言っても、その風土は自然的というより歴史的なもの」という言葉も、なるほどと了解される気がしました。

■ストラスブール大学若手研究者によるレクチャー

ストラスブール大学日本学部講師（日本語教育）の石黒秀昌先生による、「ことばと国家—外国語で暮らすということ」と言うタイトルでの講演。言語は、われわれが支配する道具ではなく、むしろ、重力がそうであるようにわれわれを支配するものであること、そして、日本人にとっては日本語が特にそうであって、そのことを「国語」という呼称が示していること、そのことがプラスとマイナスとを有することが、わかりやすく語られました。

◆「レクチャーを終えて」 [※安孫子が学生向けに書いた簡単な総括]

きのうもご苦労様でした。きのうは石黒先生のたいへん周到に準備されたお話しで、おそらくまだあまりなじみのない言語の問題に、それぞれ、新たに目が開かれるような思いを経験したのではないかと思います。「私は外国語が苦手で、日本語しかしゃべれません」といったあたりまえの言い方に、どれほど大きな問題が隠れているのか、それを皆さんに（我々に）気づかせるというのが、石黒先生のお話しの狙いでした。

まず、我々と言語との関係は「しゃべれる、しゃべれない」といったことではないということ。「しゃべれる、しゃべれない」には、〈言語は道具。我々は道具の使い手。我々はどの道具も手にできるが、それを使いこなすにはスキルが求められる。〉といった、「言語＝道具」の考えが含まれるでしょうが、そうではないということが大きなポイントでした。それを石黒先生は「日本語は、私の言葉ではない」と表現されました。それは、「これは、私のパソコン」といった意味で、日本語は、私がどうしても勝手に扱える、私の道具、なのではない、ということです。言語とわれわれとの関係は、むしろ逆で、「日本語が〈わたし〉そのものを形作っている」。それを石黒先生は「呪縛」とも表現されましたが、これは、討論で指摘されたように、「（風土においてのようにまさに）日本語において、われわれは「自己了解」する」と言い替えられることでしょう。

この「私のものではない」（私に先立っている）と表現せざるを得ないような、言語の非常な親密さは、デリダも指摘することであって、人間が言語と根本的に持つ関係です。石黒先生は、その関係を、次に、日本人、日本語の場合にさらに絞って展開されました（文法学者時枝誠記を参照）。「外国語」そして「国語」の問題です。なぜここに「国」が入るのか。とくに「国語」について、我々は「英語」、「フランス語」と並べて「日本語」とせずに、なぜそれを「国語」と呼ぶのか。まず「国語」が（実は「日本語」自身がそうであるように）明治以降の、近代国家成立と軌を一にして登場した言葉であることが指摘されました。また、その際に、この言葉の日本人にとっての親密さ（日本人であればその言葉が分からないことは不可能）ゆえに、この言葉が「日本民族精神」と不可分なものとされたことも指摘されました。このことから、負の面として、戦前、戦中には当時日本に併合されていた朝鮮への「国語」の押しつけが行われました。しかし、今日でも、たとえば小学校の「国語」をただちに「日本語」に変更してしまうことを躊躇させるような、何かしらの大切さを「国語」が有していることは否めません。それが何なのか。また言葉とのこのような親密な関係は日本、日本人に特有なことなのか。こういった点で、その後も活発に議論を行いました。その際には、国際日本学研究所の高田圭先生からの整理―親密さの粗密ということで、言語には、英語型（粗）→中国語型（中間）→日本語型（密）の3グループが存在しよう―は、大変、貴重なものでした。

こうして、言語に話題は移ったものの、昨日の「言葉とは何か」の議論は実は「風土とは何か」を相変わらず問うものだったと言えるでしょう（「国語」＝風土、「日本語」＝自然）。

■「国際哲学特講」OBOGの協力によるCEEJA追体験企画

最終日、「国際哲学特講」の陰の支えでありながら、今年度の受講生たちが実体験できないCEEJAについて、徳江さんから、またこの授業のOBOGたちから、語ってもらった時間をもうけました。

徳江さんのお話でショッキングだったのは、CEEJAが、この1月1日から、あの古い修道院跡の広大な敷地を出て、コルマル市内の県庁近くの建物に移転したというニュースでした。ただこの移転で、CEEJAの活動そのものに変化は生じません。われわれのプログラムを含む、教育研究における日本との交流事業を支える役割は、これまで通り維持されます。しかし、ブドウ畑に囲まれたあの敷地、そしてその敷地内にあった宿泊施設をもう使うことは出来ません。残念な思いを禁じ得ません。来年度以降のアルザス研修での宿泊は、代替の近くの公的宿泊施設でとなる見込みです。

OBOGたちとの話はグループで分かれて行われました。CEEJAでの体験談を超えて、それも一つの梃子としてOBOGたちがその後、社会にどう出ていき、社会でどう活躍している

のかといった、人生談が交わされました。

§3 研修についての参加学生の声

以下は本年度授業の受講者で、今回のオンラインでの海外研修に参加した学生 7 名全員の声です。

■////////////////a////////////////

この半年間の授業を振り返り、私が素直に思ったのは「海外の学生とめちゃくちゃ交流した(この表現がぴったり)」ということです。この授業に憧れる理由の海外研修が消え、履修をするかしないかですいぶんと迷っていた私ですが、その残念さを乗り越え、自宅のパソコンから異文化体験、喜びを感じる異文化交流をすることができたのです。授業を終えた今では、この授業を受けていない場合を考えると半年間の経験全てを得られなかったことにハラハラします。

そもそも私は、今までこのように外国人とコミュニケーションをしたという経験がなかったので、新しい世界に入り込み、ストラスブール大学との合同授業に一層労力と興奮が入りました。それは私が半年前に予想していた内容を満たし、溢れるほどです。しかもそれらは授業が終わったから止まってしまうといったものでもありません。例えば授業終了後、時間が合う学生同士で2度もzoom懇親会を開きました。

ストラスブール大学の学生たちとは10月から月に一度の頻度で、1月からは週に一度の頻度で両授業クラスによる2月の合同発表会に向けた打ち合わせをしてきました。それに加え、学生間ではそれぞれに振り分けられたグループでテーマを設定し、時差が大きく、使える日本語の幅が限られている中で、タイミングを見つけてはオンライン上で準備をしました。初めはよそよそしく、へらへらとした態度でしたが、会う回数を重ねるごとに会話で笑い合えるようになったこと、母国語を教え合うなど互いの領域に興味を持ったことは今でも大きなものを得たと考えています。これはもちろん、私たちが有利な位置に置かれている日本語の上で成り立ったものであり、理解しようとしてくれたストラスブールの学生たちのお陰です。彼らは相当疲れただろうと思います。なぜなら今回取り上げられた和辻哲郎の『風土』は法政大学の学生たちもなかなか理解しにくい複雑なものだったからです。私は和辻の言い方になかなか慣れず、読み進めても少し経てば今まで知っていたことを思い出せなくなるほど、本来身近にあるはずの風土を理解できませんでした。

そこで私が強く感じたのは言葉の力です。それをまず初めに教えてくれたのはストラスブール大学の学生たちです。「分からない」と言われれば、私たち法政側がフォローしたいものですが、私たちにも難解な内容を、何を使って、どのように届けるかを同級生たちと練りました。たった一言に長い時間を拘束されたのは私たちの考えるという作業が鍛えられたと思います。さらには「日本が好きだから日本語を勉強している」という彼らの共通した主張にも強い印象を受けました。若手研究者の石黒先生の講義内容を使わせていただくと「(日

本)語は私の言葉ではなく、借りたもの」です。私はその言語を味方につけた「私」は何者にもなれるように思えます。

海外研修が唯一プログラムされている国際哲学特講が海外研修無しというのは私を不安にさせました。しかしストラスブール大学の黒田先生と安孫子先生の思い付きで予定をクルクル変えられたのは非常に振り回されましたが、今ではあれくらい忙しければ情熱が冷めていただろうと何もかも面白く思い出せます。初めにも言いましたが、私は半年の中で同級生とも海外学生ともたくさん意見交換をしあい、私がただインターネットなどで調べるだけではたどり着けそうにない彼らの風土を直接伝えてもらいました。果たしてこれは、去年までのように学期末の2月に初めて会い、互いにため込んでいた知識をぶつけあうやり方でも、自分に叶えられたことなのだろうか、と考えるほど自分の世界が広がっていくことを感じた時間でした。

私は今、フランス語の勉強をマスターしようと燃えています。(まだ始めていませんが、笑)この授業で知り合うことが出来たストラスブール大学の友人が協力してくれるようなので頑張れそうです。この授業によって、日本語を勉強してそれをしっかりと外に出すストラスブール大学とハイデルベルク大学の学生たちに魅了され、挑戦したい気持ちを持つ機会を与えてもらいました。

■////////////////////b////////////////////

オンラインで国際哲学特講が開講されると知ったときは、どのような形で進んでいくのか不安があった。しかし、研修が終わった今思うのは、そんな心配を忘れるくらい充実していたということだ。もともと自分がこの授業を履修しようと思ったのは、「せっかくの機会だしやってみよう」という単純な動機だったが、実際に受講してみると、思っていたよりも大変で、これまでの授業に対する自分の姿勢を反省する機会になった。

まず『風土』の読解に苦労した。何を言いたいのかさっぱりわからなかった。だが、ここから脱するため、自分に発破をかけるつもりで最初の合同ゼミの発表者に立候補した。結果、風土に対して自分の身近なものから考えていったことで、よい手がかりを見つけることができた。また、授業では自分が思いつかない考えや意見を言ってくれる6人の仲間の存在が大きく、少人数だったからこそ1人の意見を掘り下げることができ、とても良かった。ストラスブールとの合同ゼミは回を重ねる度に立ち入った議論ができたように思う。フランス語ではわかるのに日本語で表現できないこと、普段通りではない日本語を使うことという双方の課題が、お互いに工夫を重ねたことでだんだんうまくいったのだと考えられる。何度も合同ゼミで話していたこともあり、研修当日も話しやすかった。共同発表はトラブルがあって直前まで心配していたが、無事に発表が終わって安心した。フランスの学生と話す機会が多く、この共同作業はとても刺激的だったため、来年もやった方がいいと思う。

ハイデルベルク・ゼミでの発表は、先生からの質問に答えられなかったところから、風土理解が完全に自分のものにできていないことがわからされた。話し合いは、自分の日本語が通

じゃないということは全くなく、全員が当たり前のように日本語を用いて議論していたため、本当に驚いたと同時にドイツ語を選択しているのにこの場で実践として使えないことの悔しさを感じた。自分がやってきた、ただ単位を取るためだけのその場しのぎの勉強は全く意味がなかった。そのため、これからは文法だけでなく話すことも練習していきたい。

徳江先生と石黒先生のお話は、自室にいながらにして、知らなかった世界を見ることができた。しかも、歴史や言語も風土と結びつけて考えることができ、日本にいただけでは感じるできないものを知り、外に出ていかなければならないと感じた。

研修の最終日、自分が今回の研修で感じたようなことを何かへとつなげてきている先輩方の言葉は自分の心に深く刺さった。新しい世界に身を置くことには勇気が必要だが、そこを達成して、「とりあえず」を続けると「好き」につながる可能性があるというのはこの先のどんな場面でも重要なものになるだろう。

この特講での自分の変化や得たものは具体的にわからないが、自分の中の何かが動いたことは確かだ。いつかその違いがなにかにつながるときまで前向きに挑戦していきたい。

そして必ず、今回行けなかったアルザスへ行き、生で“アルザス”を感じようと思う。

■//////////////////////////////// c //////////////////////////////////

私は、コロナの流行によって大学に通えないこのような状況でも、何かに挑戦したいと思いこの特講に申し込みました。そして今、挑戦して良かったと思っています。

最初は、一人ずつフランスの大学との合同ゼミで発表をしなければならないと聞いて、他の授業の課題が沢山あるのに発表の準備もしなければならない…と正直少しどんよりしていました。しかし、終わってみるとあっという間で楽しかったです。風土というものが私の人生にどのようにかかわってきていたのだろうか、日頃の生活を見つめなおしたり、考えてみたりするたびに、大げさかもしれませんが人生において大切なことをしているように感じました。先生が丁寧に添削してくださったことも、とても印象に残っています。フランスの学生さんにどのように言葉にしたら伝わるのか、先生のくださった添削と作成したパワーポイントを見比べながら、何度も推敲しました。フランスの学生さんと、そうして出来た発表を踏まえて話し合いをできたことは、とても良い経験だったと思います。何より、フランスの学生さんたちの意見やそれを伝える会話力に大変驚かされました。フランスの学生さんの発表にも、文化の違いや考え方の違いがあり、けれどその中でも日本人と同じような側面もあって、本当に興味深かったです。住んできた環境や年齢が違う人と話すのは、とても面白いと改めて感じました。

そのため、フランスの学生さんとの合同研究を提案していただいたとき、即座に挑戦してみたいと思いました。実際に始めてみると、フランス側から沢山面白い話を聞くことができ、うまくいきそうだと思います。しかし、途中から雲行きが怪しくなってきます。議論が深まるにつれ、日本語がうまく伝わらないということがたびたび起きたのです。こちらの日本語が伝わらないことはもちろん、向こうの言いたいことが分からないこともあり、話し合い

がなかなか進まなくなりました。時差があるので話し合いを延長したり、そもそも全員の都合の良い時間を見つけるのも難しかったりしたので、LINE を使ってメッセージの送り合いでの話し合いも試みたのですが返信が来ないこともあり、無事に発表が出来上がるのか何度も不安に思いました。私でさえ不安だったので、リーダーの下川原さんはより不安なのではないかと思い、連絡をして励まし合いました。そんな状況下もありましたが、できる限り簡単な日本語で丁寧に時間をかけて説明をしたり、フランスの学生さんが詰まった言葉を予想して当てたり、会話を工夫することで短い時間で議論を進めていきました。とはいえ、日本の学生側のみが大変だったわけではないと思います。フランス側も、班員が一人抜けてしまったり、慣れない日本語で会話をしなければならなかったりと、大変な中一緒に研究を作り上げてくれました。無事に発表ができたときは、本当に感慨深かったです。

ドイツの学生さんとの合同ゼミも本当に面白かったです。日本語が驚くほど流暢で、冗談まで言うので驚きました。日本の政治のことも知っていて、私は議論を展開できるほど政治について知らなかったので少し反省してしまいました。とても良い刺激を受けました。

現地に行くことはできませんでしたが、フランスにいらっしゃる徳江さんや石黒先生のお話を聞くことができたことも含め、とても良い経験をさせていただきました。この状況下で日本でできる最大限の活動をさせていただくことができたのではないかと思います。

そして、過去に国際哲学特講に参加した先輩方のお話を聞くことができたのも、私にとってとても大きな経験でした。自由に自分の力で道を切り開いていらっしゃる方ばかりで、私もより大胆にさまざまなことに挑戦していきたいと考えるきっかけになりました。

この特講が終わった今、私は以前より哲学に親しみを持っています。目には見えないけれど日常に、私の中にある、風土のようなものを、これからも大切にしていきたいです。

■////////////////////d////////////////////

今回、国際哲学特講を通してテーマであった風土のほかにも多くのことを学ぶことができました。法政の授業では和辻哲郎の『風土』を読み進め、そのままでは目に見えない「風土」というアイディアを身近な物事を通して徐々に理解していくのがとても楽しかったです。それぞれの経験から得た風土についての例や解釈の仕方が違い、他の生徒がどのような話をしてくれるのか毎回の授業が楽しみでした。

そして私にとっての最も大きな収穫はストラスブール大の学生たちとのグループワークでした。グループワークの最初は互いに何から話していいのか、テーマのどこから手を付けるか迷いながら進めていましたが、SNS での会話や Zoom での話し合いを重ねていきどうにか発表することができました。フランスの学生たちとのコミュニケーションは日本語でしたが、普段のような話し方では日本語が早すぎたりよく整理されていないため、どんな言葉をどの様に使うかということに気を付けるようになりました。そしてそれはフランスの学生を相手にした時だけではなく、日本の他の生徒たちと話すときにも「この言葉がまさに意味することは何だろう」と考えながら、改めて言葉を選びながら自分の考えることについて

話そうとするようになりました。この言葉の使い方についてはこれから哲学の学びを深めていく中でも大切になると感じています。

今年の国際哲学特講は例年の海外研修が無くなった代わりにグループワークが行われプログラムの内容が少し変わりましたが、おそらく今まで参加された先輩方と同じくらいたくさんさんの学びを得ることができたのではないかと思います。経験したことを忘れぬように、また新たな学びを深めていきたいと思いました。

■////////////////////e////////////////////////////////////

今回、国際哲学特講を受講し、風土について学習したが、まだ風土という曖昧な概念について理解できておらず、誤った解釈をしていないか不安なところがある。しかし、この授業を通して得たことは多くあり、非常に興味深かった。特に、ストラスブール大学の学生と共同作業をして得たものは多かった。

風土について、私のグループでは受け取り方の違いについて考えたが、その際に風土とはどのようなものかを明確にする必要があった。日本人にとっての和服やフランス人にとってのモナリザも、自己了解ができ、歴史的で堆積されるものであるため、風土に含まれると考えていた。しかし、このような伝統的なものが風土として捉えられるのであれば、伝統文化を守る意識が高いフランスでは、風土が受け取りづらいと説明できないと思った。

また、自然と共生する日本人と、自然を支配するヨーロッパ人について例を挙げながら理解するつもりだったが、自然という言葉を使いすぎてしまい、自然と比較される風土についてよく説明できなかった。自然と共生しようとする、あるいは自然を支配しようとする意識を持つことは、自然から影響を受けている人間の感情であると考えれば、このような人間の意識が風土というのではないかと思った。

授業を通して一番興味深かった内容は、風土が人間に影響を与えていることだ。私は、ストラスブール大学との合同ゼミで牧場型の風土とモンスーン型の風土と砂漠型の風土について調べたが、この3種類の風土は、その地域の気候や湿度が、自然や人間の性格に影響を与えることを学んだ。風土は、人間に影響を与えるものであることがよく理解できた。確かに、砂漠型の風土では青山が一切なく、植物の生えない赤山は死を感じさせ、このような環境では人間の感情も豊かにはならない。人間の感情がその地域の気候などに影響を受けている状態が風土であると私は理解した。よって、気候の変化や湿潤乾燥の移り変わりが激しい日本では、より頻繁に激しく人間に影響を与えるため、風土が受け取りやすいのではないかと考えた。

私は先ほども述べたように、風土の理解に不安があり、まだ混乱している。しかし、風土の理解以上に、フランスの学生と交流し意思疎通ができたことが最も大きな収穫だった。外国人だけでなく、日本人の学生とも、会ったことがない学生と会話することは不安だったが、他の学生が未熟な私の意見を解釈して深く考えてくれ、納得してもらえたことで自信を持つことができた。風土の解釈以上に、オンライン研修を受けることは大変だったが、以前よ

りも発言力や、多くの視点からの意見を聞いたことで、固定的な考え方ではなく柔軟な思考力が身についたと思う。今回の研修で身についた力をこれからも発揮し、努力していきたい。

■////////////////////////f////////////////////////

和辻哲郎の「風土」を読んだ当初は、風土について自分の考えを発表することなど、到底無理なものだと感じておりました。聞いた言葉であり、ある程度イメージを持っていた風土という言葉だからこそ、改めて難しい文章で説明されたときに、理解が追いつかなかったのかも知れません。しかし、しっかりと理解ができていなかった段階で、始めにストラスブール大学の学生に発表をすることになり、そこで自分なりに理解がしやすい具体例に落としこみ、考えを重ねた結果、少し風土とはこういうものなのかもしれないという理解に少し近づくことができた感覚がありました。ただ、和辻の風土がどういうものなのかは、少し理解しているものの、それに対して自分の意見を持てるほどではありませんでした。

授業が進んでいくなかで、環境問題という話題が浮かんできました。坂口安吾や日野啓三が主張する反風土論も決して理解できない主張ではなく、坂口らが生きていた時代よりも便利な時代に暮らしている自分としては、むしろ共感できる部分の方が多かったです。もちろん、風土は大切であると考えていても、どうしても便利さに頼ってしまっている時代であることを痛感しました。その理由は、風土を重んじた生活を送ったときのメリットを探すことや、風土と時代の最先端、環境保護を共存させる方法を考えることがすごく難航してしまったためです。しかし、このことをさらに強く感じたのは、自分たちの発表が終わった後に、ハイデルベルク大学の学生と意見を交換したときです。彼女は、日本橋問題について私が聞いたときに、「今の人たちは便利さを求めすぎていると思うよ。」と伝えてくれました。そして、時代を越えても残るものは、私たちに癒しや、現実逃避感を与えてくれるという話になりました。私は、私たちが生活する現代は便利さが失われることをとにかく恐れているけれども、それ以上に便利さ、効率を究極まで求めた世界では、癒しや現実逃避感を与えてくれる文化や建築物が一切ないと考えるとさらに恐ろしく感じました。この意見は、日本を完全に外からの目線で見ている学生だからこそ頂くことができた貴重な意見であると考えます。

ストラスブールの学生との合同発表では、私は授業のなかでも、環境破壊の問題と風土との関わりについて興味があったのでテーマを決める際に提案をしてみることにしました。しかし、環境破壊の問題と風土の問題は関係がなく、環境保護の活動を紹介するだけに留まるのではないかと、それでは授業の内容から離れてしまうという率直な意見をいただきました。そこで、私が自分が育ってきた場所や関わってきた場所を守りたいという感情があるからこそ、私たちは環境保護に努めようとするのではないかと、そこで生まれる守りたい、大切にしたいという気持ちは風土ではないかと提案を重ねたとき、初めて理解を得ることができ、さらに、私たちのアイデンティティと空間が結びついて生まれる気持ちが風土ではないか

とストラスブール大学の学生が提案をしてくれました。発表の準備を進めていくなかで、グループ全体で感じている共通意識を感じることができました。

発表を終えた後の意見交換でも、様々な意見を聞くことができました。環境破壊が進むほど、風土を守りたいという気持ちは強くなるのかという問題提起に対して、風土はもっと深く自分に根付いているものであるから、環境破壊が進もうと関係ないという意見を聞いたときに、自分が環境破壊と風土を密接に、直接的に考えすぎていたことに気付き反省しました。合同ゼミの前と後では、風土に対しても、環境破壊の問題に対しても考えがすごく変わりました。和辻の風土が難解であったが故に、風土を感じながら生活することに、そこまでのメリットを感じておりませんでした。便利さを求めすぎた生活の罨や、環境問題があまりにも大きすぎて、直接的な問題として扱うことが難しいことなど、さまざまな考えに気づくことができました。合同ゼミの前では、風土や環境問題について考えすぎていたために視野が狭くなっていたのかも知れません。そこに、外からの目線でたくさんの意見をいただくことができたため、今までとはまた別の考えを見つけることができました。最終的には、メリットを感じていなかった、和辻の風土の立場の方が良いのではないかという考えに自分の中で傾いたほどです。しかし、まだまだ和辻の風土を理解することが必要なので、改めて読み返したうえで考察を試みたいと考えます。

最後に、合同ゼミに関わることができたストラスブール大学の学生とハイデルベルク大学の学生の日本語のレベルには、終始驚いておりました。日本、そして日本語に興味の対象であることが嬉しかったと同時に、日本の良さを今後も守っていく必要があると強く感じました。合同ゼミは自分の中ですごく考えが動かされ、刺激的で楽しい授業でした。このような機会を設けて下さり、ありがとうございました。

■////////////////g////////////////

今回の国際哲学特講で学べたことで、最も大きかったことは、他言語を母語とする人間とのコミュニケーションの難解さを知れたということです。趣味の話や、一般的な話は、共通の話題であるため、多少言語のずれがあっても通るのですが、風土のような、日本人にとっては漠然と思い描けるけれども、他国の文化の中にいる人とは共有しえないような、感覚的な概念をはっきりと言語化して伝える難しさは、今回初めて実感したことでした。9日の石黒先生の話で、「言語が分かることと、コミュニケーションをとれることは違う」という話がありましたが、言葉の意味が分かるのと、話の文脈を理解するのはまったく別話であり、日本語として意味は通じていても、相手がピンと来ていなさそうに見えるという場面は、発表のためのグループミーティングでも多く見られる場面でした。そのような場面の中で、共通の趣味の話をして、「コミュニケーション」をとりつつ、難しい話は、フランス人の方たち同士がフランス語で相談しあう時間を作り、少しでも「理解」につなげるような工夫をし

たことで、結果としてよい発表ができたのではないかと考えています。今回は私たちが日本語で話していたため、私たちが言語の壁でつまづくということはありませんでしたが、このように、言語の壁を境にして、相手と容易に意思疎通することができないという負荷を自分にかけていくことは、とても大事なことであったと実感できたように思います。というのも、この体験は、普段日本語でコミュニケーションをとろうとする際にも、自分の当たり前が、相手にとって当たり前ではない、ということを改めて実感させるものであり、しかしそれは、日本語で話しているときには決して身につかないものであるように思えるからです。いづれフランス語で話す機会があるかもしれませんが、このような機会は二度とないかもしれませんが、スティーブ・ジョブズの「点と点をつなぐ」という話のように、いつかこの経験が、予想もしえなかったような役に立つことがあればよいと思います。

また、最終日のOB・OGの方との交流会では、将来の進路につながる貴重な話をたくさん聞くことができました。今まで私が就活の対して持っていた先入観というのは本当に一部にしか当てはまらない事例で、先輩方の中にはあまり聞いたことのないような、不思議な進路を進んでいる方も多くいらっしゃって、そんな先輩方の多くが、「今も哲学が役に立っている」と話しており、とても新鮮でした。将来のことについて、やりたいことはいくつかあるのですが、それを絞れていないうえに、意欲はあっても知識や手段を全く有していない状態だったので、先輩の助言がとても参考になりました。特に参考になったのは、「やりたいことを本気でやろうとすればうまくいく」「大事なことは人脈を作り、行動すること」「迷っているならとりあえず行動して、消去法で決めればよい」という意見などでした。どれも考えてみれば当たり前のことなのですが、今まで進路を見る上で抱いていた、言語習得は就活のため、などの固定観念を捨てることができたという点で、自分の進路を決める上での大きな後押しになったと思います。今後も先輩に連絡を取って、いろいろなことを聞きたいと思っています。普段のサブゼミだけでは決してできなかった体験をできたという点でとても興味深く、貴重な体験だったように思います。

////////////////////////////////////

[※以上はリアクション・ペーパーとして提出されたものを、全員からの了承を得て転載しました。]

§ 4 研修についての内部評価

■黒田昭信先生（ストラスブール大学日本学部）から

「日仏合同ゼミ終了 — 予想を超える成果を自力であげた学生たちを心から称賛する」

昨年九月から準備を重ねてきた法政大学との遠隔日仏合同ゼミが昨日今日の最終ゼミをもって終了した。法政側のプログラムはまだ三日残っているが、弊学科との合同ゼミとしては今日が最終日であった。昨日今日とそれぞれ二つのグループ発表を行い、それぞれの発表

後にグループ・ディスカッション、全員でのディスカッションという順で進行したが、各日に予定されていた三時間を大幅に超過するほど、そしてそれでもグループ・ディスカッションの時間は足りなかったほどに、充実した二日間であった。

今年度の新機軸と言えれば聞こえがいいが、実のところは私が昨年十二月半ばの遠隔セッションのときに思いつきとして、日仏混成チームを作り、両国の学生が協力して一つの発表をこの二月の最終セッションのために準備することを提案した。これは年度当初には予定されていなかったことで、この出し抜けの提案に学生たちは最初明らかに戸惑っていた。

共通言語として日本語しか使えないことも大きな制約であった。日本人学生たちにとっては、自分たちが普段使っている日本語をそのまま使ったのでは理解してもらえない。どう表現したら通じるのか、つねに問わざるを得ない。弊学科の学生たち（一人はブルガリア人でブルガリアの首都ソフィからの参加）にとって、テーマについていろいろ考えていることはある（日本人学生たちが学部二年生であるのに対して、彼等は修士一年であるから、知識の点では明らかに一日の長がある）のに、それを日本語でうまく表現できない。双方それぞれに困難を抱えながらのコミュニケーションであった。

正直なところ、過大な要求だったかと私も不安になった。しかし、それは杞憂に終わった。四グループそれぞれ、連絡を取り合う方法の模索から始まり、テーマの決定、作業の分担、最終的な発表原稿の作成と推敲、それと連動したスライドの作成という一連の作業を、実質の準備期間は一ヶ月もなく、集中的に取り組めたのは最後の二週間弱という、とてもタイトなスケジュールだったにもかかわらず、テレビ会議だけでなく LINE も活用しつつ、すべて遠隔で見事にやり遂げた。その成果は昨日今日の発表に十二分に示されていた。

昨年九月、日仏それぞれべつべつに和辻の『風土』の読解から始めたときは、テキストを前に学生たちが覚えた理解の困難がこちらの予想以上に大きく、教師側も途方に暮れかけた。その後、なんとか理解の緒を彼等が自分たちで見つけられるようにとさまざまに工夫を重ねていくうちに、彼等が次第に問題を自分の経験と知識に引きつけて考えられるようになり、和辻の風土概念そのものの理解という点では必ずしも十分に深まったとは言えないところもあるが、風土概念を巡って、感覚、言語、宗教、神話、民間信仰、慣習、自然、生態系、都市環境、エコロジー、共同体、国家、アイデンティティなど、様々な問題にアプローチし、それらのテーマについて自分の頭と感性で考えを深める機会となったことは、一つの成果と言っているのではないかと思う。

一つの概念の理解の困難から始まり、それを参考文献の助けを借りて書物の中だけで解消しようとする（あるいはしたつもりになる）のではなく、自分たちの具体的な経験に基づきながら、それをいかに問題化し、議論を展開するかという演習を彼等はこの五ヶ月継続してきた。昨日今日の発表は、その演習を通じて彼等が驚くほど成長したことを如実に示していた。よくはわかっていない借り物の哲学的概念を操って蝶々とテツガクの風土論ができるようになったところで、それが何の役に立っただろうか。彼等は、この演習を通じて、それとはまったく違った、今後にも応用が効く、問題へのアプローチの方法を学んだのだ。

学生みなさん、あなたたちがこの五ヶ月間にやり遂げたことに自信と誇りをもち、このいつまでつづくかわからない困難な状況の中、一步一步、前に進んで行ったださることを心より祈念しています。

[※黒田先生のブログ（2021-02-07 23:59:59 | 講義の余白から）に掲載されたものを、許可を得て転載しました]

■徳江純子さん（CEEJA、ストラスブール大学日本学部）から

．．．

コロナ禍でかえって私の元にも日本の大学から色々な交流の問い合わせが来ておりまして（県立大学等々）、オンラインだからこそできる試みに注目を感じます。そのような中で、すでに授業に組み込む形を成立させている国際合同授業のパイオニアでいらっしゃることは明らかに他と一線を画している印象です。教育事業は成果が出るまで時間がかかりますが（ゆえにただちに宣伝効果がないということで時に公的助成打ち切りの憂き目にも合うこともあります）、間違いなく未来への投資であり、特に貴研修のような達成は一朝一夕にできるものではなく、オンラインでこのクオリティを保っているというのは、ひとえにこれまでの高い水準の専門性と厳しい積み重ねがあったからに他ならない、と確信するところです。

．．．

色々鑑みても、確かにこれほど念入りに準備され充実した国際合同授業というものは他にないように思います。どうしても実施自体に意味をもたせる意見交換会になりがちなオンライン交流会の中で、内容に意味を持たせディスカッションを臆さず交わしテーマを掘り下げるまでに至るクオリティは、何と言っても（それを学生からは見えないようにしていらっしゃるとはいえ）安孫子先生のずば抜けたご指導力あってのもので、また一人一人の学生さんたちのこの研修の積み重ねの結果なのだと存じます。重ねて敬意を表すとともに、厚く御礼申し上げます。

．．．

わたくしとしては、本来のように7名の方々に当地の学生や人々に触れ合う機会を持っていたかたかったのですが（フランスや去年の・・・のような帯同研修生をはじめ、生活の間隙まで共にするような者たちも含め）、そういった人々の息遣いや石畳の街のざわめき、ボージュの山並みを感じつつであつたら、「風土」というテーマの今回はさらにまた違った未恐ろしい成果が出たのかもしれない、と思いました。またこの7名の方々にはぜひアルザスを訪れて頂けますよう。

．．．

そのほかでいいますと、学生みなさんも事前の授業で蓄えた考察もあり比較的落ち着いて望まれていたように感じました。これはやはり時代に先駆けて授業の一環として zoom の事前準備を軌道に乗せられた先見の明が大きいと思います。他学のいくつかのオンライ

ン研修を見ますと、講演会が主眼であったり、全学部対象のため意見交換が主だったりします（それなりに議論は活発化しますが）。その中でもやはり準備を丁寧に重ねつつ一つの哲学的テーマに絞って今日的議論を深めていくという点では、本当に日本でもほかに比類がない研修かと思います。

．．．

また、本ゼミは日本語での交流と言うことは最大の特徴のひとつです。これはいつも問題になるところでありまして、欧州側としては若手であればあるほど例えば日本研究シンポジウムでの英語併用希望も多くなります。（誰もが最初から・・・先生レベルの日本語をしゃべれるわけではなく）。そのような中、スト大側の学生にとっては、このゼミで自分の知識と同等に日本語力も試されることになり、なかなか大変なしかし貴重な機会です。一方、日本側の学生さんの場合、ゼミ内では日本語での進行となりますので、外国語を通した異文化の衝撃を感じ自身の言語認識を見直す機会はその外の現地体験に豊富にあったりします。

（街を歩く、また直前まで日本語で話していた学生たちの母語会話を聞いて「びびる」体験など。）今回はオンラインなので欧州側の学生が日本語で議論するということがいかに大変なことであるか、が通じるかという点で一抔の心配もあったのですが、安孫子先生や黒田先生、石黒先生のお陰で「日本語の議論の中で対象化されていく日本語」にも注目されるなどして、その点も大変うまく取り込まれて学生さんに伝わっていたように思いました。

．．．

学生さんにはある種「確実であること（学歴・職歴の最終目標、就職活動等）」も大事ですが、こういう時代だからこそ「不確実性の中で人生のキャリアを進める」ことも重要なのだと思います。自分が面白いと思う分野を広げていくことが大切で、常識に縛られず興味あることには挑戦して行って頂きたいと思います。

[※徳江さんは書き下ろしで今回の研修についてご意見を送ってくださいました]

■君嶋泰明先生（法政大学文学部哲学科）から

「国際哲学特講オンライン研修に「同行」して」

今年度の国際哲学特講は、現地に赴いての研修を取りやめざるをえないという異常事態のなか開講された。現地研修に代わる Zoom を用いたオンライン研修は、ストラスブール大学の学生たちとの間で、2月初旬の研修以前にも定期的に行われ、そのつど学生たちは互いの進捗や成果を報告し合い、意見を交わした。またこの授業では初めての試みとして、両大学の学生たちは共同研究に挑戦し、2月の研修ではその成果を発表した。ハイデルベルク大学との研修では、主に法政側の学生の発表をめぐって活発な議論が交わされた。2月の研修では、ほかにもストラスブール大学の石黒先生や CEEJA の徳江先生の講演、国際哲学特講の OB・OG とのセッションなどがあった。

当職は昨年度の現地研修に引き続き、これらの一連のオンライン研修に、オブザーバーとして「同行」させていただいた。その目から見た率直な感想として、今年度の研修は昨年度

のものと比べてもけっして引けをとらない、得がたい成果を収めているように感じられた。

今回のテーマである和辻哲郎の「風土」は、法政・ストラスブールのどちらの学生にとってもかなりの難物だったらしく、その理解をめぐり学生たちはもがき苦しんでいるようだった。しかしそれでも学生たちは、最終的には各々「風土」の典型例を見つけ、それを糸口にすることにより、自分たちなりの「風土」理解を磨き上げていったようである。その集大成である2月の研究発表では、学生たちは「風土」というわかるようでわからない概念の理解を求めて、試行錯誤の末つかんだ方向感覚を信じ、一步一步、いわば道なき道を踏みしめながら歩んでいるように見えた。もちろん、そこには陰に陽に安孫子先生、黒田先生による先導があったはずだが、当職の担当するほかの授業での学生たちの印象と比べても、この短期間にこれほどたくましく成長するものなのかと目を見張った。個々の発表はもちろん荒削りではあったが、どれも借り物でない、自前の議論であり、テーマに誠実に向き合っているように思われた。そしてできる限り平易な言葉でわかりやすく語ろうとする工夫がそこそこに見えたのも印象的だった。

このような学生たちの成長は、その少なくない部分が、今回の共同研究の試みによってもたらされたものだったろうと感じる。ハイデルブルク・ストラスブール両大学の学生が一定の日本語能力をもっていることはこの授業の前提であり、この授業が成立するのは（法政の学生に特段の語学力が要求されないのは）彼らのおかげである。しかしそれでも、「風土」のような難解な概念をめぐるのは、自ずと彼らの現時点での日本語能力の制約も露呈し、議論が難航したであろうことは想像にかたくない。そればかりではない。それこそ異なる国の異なる「風土」を生きてきた者同士が、互いの「風土」理解の共有を図るということ自体が並大抵のことではない。法政の学生たちは、このような二重の困難を乗り越えるというミッションを帯びて、率先してストラスブール大学の学生たちとコミュニケーションをとり、見事発表までこぎつけた。その過程で学生たちがどのような工夫をこらし、どのような気づきを得たかは、研修を終えての彼女たちの感想にまざまざと語られている。

そしてこのすべては、コロナ禍に強いられて始まったオンライン研修のもたらした、当初の予想を超えたポジティブな成果だったのではないか。もちろん、現地に行かなければ得られないものが多々あるのは事実だとしても、今回強いられて選択したオンライン環境が、双方の学生をして、さもなければ向き合わずに済んだかもしれないコミュニケーション上の壁に数多く直面させ、そのことがかえって学びを促進させたのである。

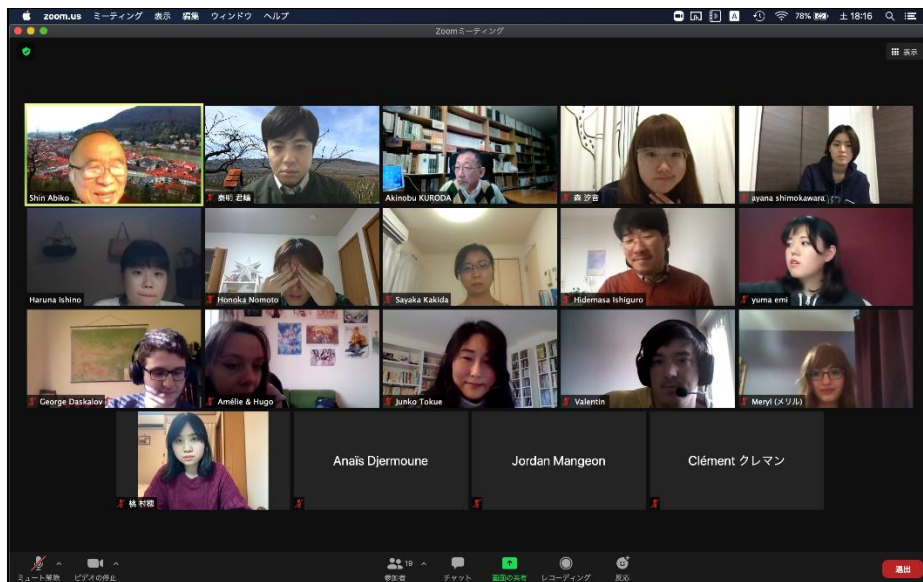
今回の研修では、おそらく「風土」というテーマも一役買って、いわゆる異文化交流のより生々しい、一筋縄ではいかない部分が垣間見れたような気がする。そのこと自体が学生にとっては得がたい経験となったはずである。

最後に、このような異常事態の中、この授業の成立のため、学生のために奔走され、ご尽力くださった先生方、国際哲学特講のOB・OGのみなさんにあらためて感謝し、敬意を表したい。そしてそれに応えた学生のみなさんの頑張りに心から拍手を送りたい。

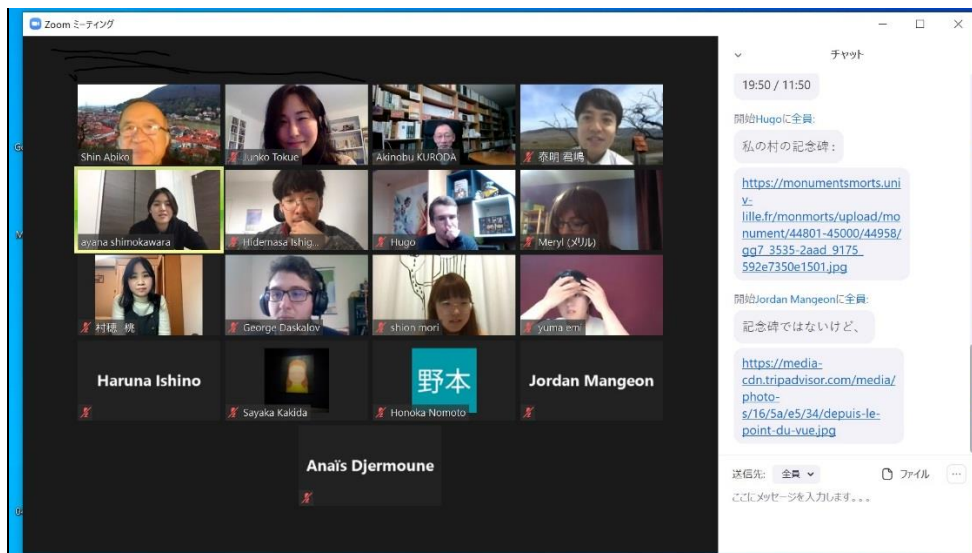
[※君嶋先生は書き下ろしで今回の研修について感想を送ってくださいました]。

§5 スクリーン・ショット画像で見る研修の様子

◆ストラスブール大との合同ゼミ 1



◆ストラスブール大との合同ゼミ 2



◆アルザスのヴァーチャル・ヴィジット

**アルザスの人々はここから20年ほど
フランス国民として生きる**

フランス軍のシュトラースブルク入城は住民の熱狂的歓迎を受ける。

その後フランス共和国は、

- ・アルザス=ロレーヌを共和国に編入
- ・通貨をフランに切り替え
- ・ドイツ系やドイツ資本の企業は国家の信託機関がその経営を引き継ぐ。
- ・ドイツ国籍を放棄しなかった者たちはドイツへ退去。
- ・ストラスブール大学の教員はフランス人中心。
→例 マルク・ブロック Marc Bloch (アナール派の歴史学者)
- ・住民はまた逐次全員がドイツ語話者→フランス語的な所謂化徹底、ドイツ語排除。

1871年以前の状態に戻すことを目標とする = 「全力後進」 machine arrière

◆若手研究者レクチャー

12 / 27

ジャック・デリダの単一言語使用 monolinguisme

私にはただ一つのことばしかない。そのことばが私のものではないということ。 [...] ただ一つのことば。ただそれだけが私の終の棲み家なのだ。それがありありとわかる。私がそれに宿っていること、また、それが私に宿っていることが、 [...] 動かしがたく、抜けだす余地もない。ただ一つのことばに浸されている。ただそのことだけを、あげつらうことしかできない。 [...] ただ一つのことば。それは、私のことなのだ。それなしには、私は私でさえない。 [...] にもかかわらず、私のものではありえない。(拙訳、Jacques Derrida, 1996, Le Monolinguisme de l'autre, Galilée)

◆OBOG たちとの会

